

大学に  
おける

# 一般教育の本質と役割



## 同志社大学一般教育研究会

同志社大学一般教育研究会は大学における一般教育の現状とあり方を調査研究することを目的として、各学部ほぼ二名ずつの有志が集って、昭和三十七年四月に発足し、その間昭和三十七年には同志社大学人文科学研究所の研究助成金、昭和三十九年には京信育英会の研究補助金の交付をうけて、今日まで大学の一般教育に関する、現状の調査、資料文献の蒐集、他大学との合同討議、大学設置基準改善要綱の一般教育関係部分の検討などを行なって来たが、とくに昭和三十九年六月には本学二、三年生二千名を対象として、大学の一般教育に対する受講者の意見調査を行なった。今回その集計と分析の作業をあらまし終えることが出来たので、ここに三ヶ年余にわたる討議の結論とともに発表する次第である。なにぶんにも、人手、時間とも不足がちな共同研究で種々問題もあることとおもわれるが、大学の一般教育についての真剣な討議が強力にわき上がる一つの契機ともなれば幸いである。

### 大学における

### 一般教育の意義とあり方

新制大学制度が発足したのは戦後間もなくであった。しかし、それは現在においてもまだ地についていないかのような一方では旧制大学への接近を求める声、また他方では実際に役立つ専門技術の習得を目標とした旧制専門学校の再現を意図する声、そのなかで新制大学制度はゆさぶられている。とくに

新制大学における一般教育課程に関しては、種々の立場から批判が提出されている。このことは新制大学発足以来、一般教育が所期の目的を達しえなかったことを物語ると考えられるが、いずれにしても、一般教育がこれまでの経験と反省のうえにたつて、改革されるべき岐路に立たされていることは否定でき

ない現状である。

わたくしたちの研究会は、一方では、発足当時における一般教育の理念を省みつつ、他方では、それが再検討を迫られている現在という時点に立つて、種々の側面から一般教育の意義とあり方について討論を重ねてきた。ここでは、その討論のなかで提出された若干の問題と方向の要点をできるだけ集約したつもりである。

まず、一般教育は、知識を人類の理想実現にふりむけることのできる人間の形成を目指すものであるという一つの前提を立ててみよう。この前提は、たしかに一般教育の意義を全面的につくしたのではないかもしれない。しかし、戦前の大学教育が専門的知識の偏重のなかで失いがちであった広い視野に立つ豊かな人間の形成という課題をなして一般教育が新制大学教育の課程として導入されたことは疑いえないであろうし、また、かかる人間形成の必要性は現在において、むしろ急務となっているといえよう。

さて、そうなると、一般教育は単に専門課程の入門または概論であっては意味がないということになる。しかしながら、実際には大

学教育課程の一環として、専門課程との関連性ということがつねに問題となる。というのは、ややもすると、一般教育課程と専門課程とが断絶する傾向が起りうるからである。そこに、専門課程を重視する観点から一般教育無用論が提起され、あるいは、無用論とまではいかなくとも、それを専門課程に直接役立つ基礎課程に改造しようとする考えが起ってくる余地がある。かかる提案は教授の側からも提出されるが、また、大学入学と同時に専門的知識を求める学生の側からの要求ともなる。さらにまた、直ちに役立ちうる専門的技術者を求める実社会の声とも結びつく。

このことは専門課程が戦前の三年から二年に短縮されたことによつて生じた、専門教育の不充分さということを背景にもっていると考えられるが、従来の一般教育がその意義を十分に認識されるまでに成果をあげていないことにもとづくであらう。ともあれ、かかる提案は基礎科目の設定という形で部分的に具体化しつつある。一般教育の立場に立つて考えても、基礎科目の設定そのものに直接反対する理由はないであろう。むしろ、それが一般教育と専門教育とを結びつける橋わたしの

性格をもつと考えれば、その意義は充分に承認してよいであろう。しかしながら、ただそれが、全般的に一般教育にとつて代るといふことになる問題が別である。ここでは、やはり基礎科目とは本質的に異つた一般教育の性格と意義が再認識されねばならない。

しかしながら、このことは一般教育が専門課程との関連においてなんらの効用をもたなくてもよいということの意味しない。あるべき一般教育は大学教育課程の一環として、けつして、専門課程と断絶したものであってはならないし、また断絶しないはずである。ただし、その効用性は基礎科目の場合とは異り、より広い意味において考えられねばならないであろう。こうなつてくると、広い視野に立つ豊かな人間の形成を目指しつつ、専門課程と断絶しないような一般教育はどのような内容のものでなければならぬかという、より具体的な課題に当面する。

現在、専門の学問は、細分化され、個別化されておき、その傾向は、今後、ますます進展するであろう。しかし、現実には、すべての「モノ」は相互に関連性をもっている。したがって、専門の分野が細分化され、個別化さ

第1図

学部	学科	2年生	3年生	計	二部 (2・3年生)
神		8	10	18	
		20	26	46	
文	英	188	62	250	0
		286	196	482	16
	文	106	96	202	10
		345	326	671	26
	社	49	51	100	
	計	244	273	517	
法		343	209	552	10
	法	875	795	1670	42
		164	168	332	
	政	541	529	1070	
経		27	24	51	34
	計	115	71	186	292
		191	192	383	
商		656	600	1256	
		200	200	400	17
	計	886	804	1690	341
工		195	190	385	0
	電気	724	522	1246	179
		49	35	84	
	機	121	97	218	
		50	57	107	
	計	170	96	266	
総		49	48	97	
	工化	132	104	236	
	計	148	140	288	
	423	297	720		
	1085	941	2026	61	
	3950	3044	6994	854	

(註) 調査数  
\* 在学生数  
\* 工学部は2年生から電子・機械・2・化工の3学科が  
増設されているがこれを台いた。統計は全学生数。

ればされるほど、全体のなかでのその位置づけが問題となる。専門分野の研究に立ち入るに先立ち、まず自分の専門研究の位置づけをつねに意識し、反省する思考訓練が必要であろう。一般教育が、かかる思考の訓練を可能にするとするれば、それは専門教育に対して、重要な効用をもつといえよう。このような観点に立てば、一般教育は、「およそモノを認識する場合にどのようなとらえ方が必要か」という課題をつねに根底にもつべきであると考えられうるのではないであろうか。

「モノ」は、つねに発展しており、またつねに総体として存在している。したがって、「モノ」を把握する場合にはつねに「モノ」

を発展しているものとして認識し、つねに「モノ」を相互に関連しているものとしてとらえねばならないであろう。一般教育によって、そういった「モノ」の見方を習得するならば、自分の選ぶ専門研究の位置づけが明瞭になり、また専門知識を人類の理想実現にふりむけるための実践的基準に指針があたえられるであろう。換言すれば、およそ、学問とはわれわれの人生にとってどういう意味をもつものか、ということについての前提の上に立って、自信と情熱をもって専門研究に進んでゆくことができるであろう。

しかしながら、一般教育は、もちろん「モノのみかた」そのものを抽象的に教えるわけではない。一般教育は人文科学、社会科学、自然科学、それぞれについての知識を媒介とする。したがって、つきに問題となるのは、一般教育課程における三系列、すなわち、人文科学、社会科学、自然科学、相互の関連性

ということである。こ

では、この三分野を分けるメルクマールは「方法」ではなく「対象領域」であると考えねばならないであろう。そして、それら三分野の底辺として先にのべた「モノのみかた」についての共通の思考法を考えるべきであろう。すなわち、これら三分野は共通の土台をもちつつ、上部において対象領域の差異によって区分されると考えればよいであろう。では、これら三分野の対象領域はどのように分類されうるのでしょうか。まず、あらゆる「モノ」を含む「自然」という領域は容易に設定されうる。そこには本来は人間も含まれているが、しかしかかる自然に対して、自然に働きかけるものとして自然から独立し、自然から分離し、自然と対立する人間、また人間集団(社会)を考えることができる。かくて自然科学の対象領域とは、本来は人間をも包含した自然から、とくに人間社会を除外した部分、社会科学の対象は、自然から分離した人間社会、人文科学の対象領域は、社会科学の領域のなかで、社会に働きかける人間そのものを研究する特殊領域というように考えられうるのではないであろうか。このように考えると、自然、社会、人文の三分野は個々

ばらばらの領域を対象とするのではなく、相互に密接な関連性を持ち、全体のなかで、統合されるものなのであり、それぞれの科学は、それぞれの対象領域の相対的独自性を反映して、それぞれの特質をもつにすぎないということになるであろう。かくて、ここでは、一般教育が単独科目コースよりも、総合コースにおいて行なわれることが、より望ましいという提案が重要な意義をもってくる。

## 一般教育に関する学生の意識調査

また、自分の専門研究の全体との関連のなかでの位置づけを反省することによって、その専門研究の意義を明確化するためには、一般教育、とくに、総合コースのもとで行なわれる一般教育を専門課程の前段階におくのではなく、専門課程と平行し、あるいはまた、専門課程終了時におくことが、むしろ有効であるという意見も当をえたものとしてうかがひがってくるであろう。

このほかに一般の社会人がどう考えているかを調査する必要もあるが、旧制大学の教育をうけた社会人に関しては、新制大学の一般教育の理念を説明したうえで、意見をきくべきであると考えて当面の対象から省いた。

以上の三つの調査対象は、それぞれ特殊性とともに共通性をもっているが、なかでも重視しなければならないのは学生・卒業生など被教育者の意見である。教育は、結局、教育される学生の人間形成を目標とするものであるから、それ自体としていかにすぐれた教育制度や教育内容も、それに対する学生の主体的な反応と成長を生み出さなかつたならば、無力というほかはない。その意味で、学生・卒業生の一般教育に対する意見・希望・批判は、それを直ちに是とすることは危険であるが、十分尊重されなければならぬと考える。以上の三対象のうち、現在は在学生の意識調査を終了した。

われわれは、一九六四年度、同志社大学の二年・三年生を対象にえらんだ。一年生はまだ一般教育をうけはじめたばかりであり、四年生は就職をひかえているので省いた。二年生はすでに一年間一般教育の授業をうけてい

### 1 ねらいと方法

新制大学における一般教育の理念を追求してゆく過程で、われわれは一般教育に対する関係者の感想・批判・希望を調査するの必要を感じた。一つには新制大学の理念の中心をしめる一般教育の理想が関係者のなかにどの程度理解され定着しているかを知るためであ

り、二つには、一般教育の理想と現在の制度、一般教育の理念と現実の教育条件の間の矛盾の所在とあり方を明らかにするためであり、三つには、関係者の一般教育に対する期待と希望を知るためである。われわれは次の三つの調査対象を設定した。①在学生 ②新制大学の一般教育をうけ、すでに社会に出ている卒業生 ③大学の教職員。

A.1

現在一般教育の問題が論議されております。わたくしらは一般教育の制度と内容をよりよものにしてゆかために学生諸君の意見をききたいと思っております。どうか積極的にお返事下さい。なおこの調査は純粋研究上のものですから解答者に御迷惑をかけることをつけ加えておきます。

同志社大学一般教育研究会

記入上の注意

各調査項目でくはことわりのある場合をのぞいては、該当する事項のはじめにある記号を○でかこんで下さい。

学部 [ ] 学科 [ ] 専攻 [ ] 学年 [ ] (名前を不要です)

I 興味について

- 1) 興味の有無
a 「一般教育」について全般的に興味があった
b 「一般教育」についてまったく興味をもてなかった
c 「一般教育」について興味もてる科目もあった
(2) 興味のもてた科目についてその理由(いくつ○印をつけてもよい)
a よく理解できたから
b 専門科目の勉強に役立ちそうな気がしたから
c 社会に出てから役に思うに思ったから
d 自分がもっている問題意識にぴたり合致したから
(3) 興味のもてなかった科目についてその理由(いくつ○印をつけてもよい)
a 高校で学んだ事ばかりだから
b むずかしかったから
c 専門科目と関係がないから
d 自分もっている問題意識にもと合えてくれるものがなかったから
e 担当者が熱意が感じられなかったから

II 現在の制度について

現在一般教育科目では、人文、社会、自然の三系列からのおの三科目づつ合計九科目、36単位をとらねばならないことになっています。

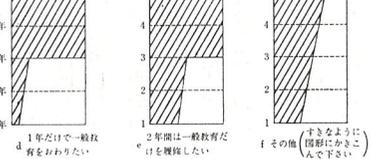
- (1) 総単位数(36単位)は
a 多すぎる
b ずくすぎる
c これでよい
d わからない
e その他
(2) 三系列それぞれ三科目づつ履修しなければならないことになっていますが
a これをよい
b 系列の枠をこえて好きな系列からとりたい
c その他
(3) 何を基準に選択していますか(いくつ○印をつけてもよい)
a 科目に対する興味
b 担当教員に対する期待
c 学部の登録指導や履修要項によって
d 先輩友人その他の意見
e 自身の時間の都合
(4) 履修に当たって履修希望されている科目の種類
a とりたい科目が充分に履修出来る
b 設課科目が多いけれどとりたい科目がない
c 設課科目の種類がすくすぎる
d その他

設課していない科目の名前をおぼして下さい

現在の一般教育科目は原則として1年、2年で終了することになっていますが、専門科目との関係について適当と思われる関係に○印をつけて下さい

(注 白地の部分は一般教育をあらわし、斜線の部分は専門科目をあらわす)

a 現行でよい b 専門科目を1.2年でもっと c 一般教育科目を専門科目と d 専ら1年だけで一般教育をとりたい e 2年間は一般教育だけ履修したい f その他



- (6) 現在は宗教学が全必修制になっていますがこれについて
a これをよい b 必修でなくてもよい c わからない

- (7) 学部によっては一般教育科目の中で必修科目を指定しているところがありますが
a 現状でよい
b 不必要である
c わからない

- I (a)に○をした人はその理由
1. 専門科目の学習に役立ちたい
2. 社会人としてその科目がもっとも役立ちたい
3. その他
II (b)に○をした人はその理由
1. 他の科目の選択をさまたげるから
2. とくに宗教に関心のあるものだけがあればよい
3. その他

III 一般教育の講義内容について

(1) やさしかったか、むずかしかったか (各自が履修した科目名をここに記入して下の表の該当するところにその番号を○で示して下さい)

Table with columns for subject categories (人文科学系, 自然科学系) and difficulty levels (難, 普通, 易). Rows include 宗教学, 社会学, 自然学.

- (2) もっともやさしくおぼえた科目についてその理由
a すでに知っていることが多かったから
b 教え方が上下でよくおかったから
c 自分と近い内容だったから
d 内容の程度が高かったから
e その他
(3) もっともむずかしくおぼえた科目についてその理由
a はじめて聞くことばかりで理解しにくかった
b 学生の理解力を考慮しない教え方だったから
c 自分の不得意な科目だったから
d 内容の程度が高すぎたから
e その他

出席について

- (4) ほとんど講義に出席しますか
a ほとんど出席する
b 出席しなくなりつつある
c ほとんど出席しない
(5) ほとんど出席しない科目についてその理由
a 講義内容に興味があるから
b 担当者の人柄にひかれたから
c クラスの雰囲気がいよから
d 出席しないと単位がとりにくいから
e その他
(6) ほとんど出席しない科目についてその理由
a 講義がおもしろくないから
b 出席しなくても単位がとれるから
c 他科の方が自分の方がつから
d 時間の都合で
I サークル活動に忙しいから
II アルバイトで忙しいから
III 通学の関係から
IV その他
e その他

その他おきづきの点があれば書いて下さい。

Blank box for additional comments.

御協力に感謝します。 以上

る。三年生は専門教育課程に入って、一般教育全体について一応反省することができる立場にある。調査対象として各学部ともにできるだけ出席率がよく、学部の全学生を網羅している科目で、しかも二重調査をさけるため、必修科目でなるべく出欠をとるクラスをえらんだ。調査方法は、各先生の協力を依頼し、学生に対し暗示や予見を与えない程度に簡単な趣旨と記入要領を先生から説明していただき、調査用紙を学生に配布し、記入してもらった。所要時間は約三十分平均。

法学部の例でいうと、二年生の法学政治学演習(二年生の選択必修)、三年生の英書(三年生の選択必修)をえらび、先生・学生双方から心よく協力をいただいた。各学部別の在学生数に対する調査学生数の割合は第1図(61ページ)のとおり約三〇%であり、ほぼ全学生の意識状況を知りうるものと考ええる。調査は一斉調査がのぞましいので、一九六四年六月下旬の一週間に行った。

2 アンケート本文  
 従来この種の調査はわりに少なく、参考にしたのは大阪市大学生団体WUS(大学問題

研究会)、同じく京大教養部WUSの二つの調査であるが、内容的にはほとんど独立にアンケートを作製した。なお調査後、「京都大学教育学部紀要」に「大学の一般教育に対する社会的要請の調査・研究」(一九六四年度)が出たが、参考にする事ができなかった。アンケートの内容は前頁のとおりである。

### 3 集計結果

a 集計表 すべての回答(二〇八七)を集計する余裕がなかったので、このなかから無作為に一〇六八を抜き出して集計した。回答数のうち集計したものの数は第2図のとおりである。

第2図

学部	在籍者数	調査数	集計数
神	46	18	18
文	1,670	552	200
法	1,256	383	200
経	1,690	400	200
商	1,246	385	200
工	720	288	200
二部	854	61	50

b 集計表の意味 アンケート調査の集計結果はそれぞれ質問事項の項別ごとに学部、学科、男女別にまとめられているが、ここでは、紙面の都合上、学部別合計のもの

を掲げてお

いた。この数表に対するあらましの分析については、すでに本誌21号で発表しておいたので、そちらを参照願うとして、ここでは受講者の出席意欲を中心として検討してみた。

まず、「ふだん講義に出席しますか」という問に対して「a、ほとんど出席する」が44%、商41%、文35%、経32%、法31%となっており、「c、ほとんど出席しない」が、経17%、文16%、法15%、工14%、商13%という順序になっている。これを見ると、大体平均して三分の一の学生は各学部ともかなり出席を確保しているが、一割五分ぐらいはこの学部でもほとんど出席していないものがあることがわかる。そして、その残りはさまざまな理由によって、出席したり、しなかったりしているわけであるが、その理由をみると、やはり、「a、講義内容に興味があるから」というのが全学部を通じて圧倒的な数字を示しており、他の項目のほとんど二倍近い割合になっている。ついで、「b、担当者の人柄にひかれたから」というのが例外なく二位となっているが、「d、出席しないと単位がとりにくいから」とか、「e、出席するのが当然だから」という項目は、この二つにく

らべると予想外に低い数字を示している。そして或はそういうことも少しはあるのではないかと予想して問いかけた、「c、クラスの雰囲気が良いから」という項目のごときは、ひどいところではただの一名しか理由としていないのである。ほとんど出席しない科目の理由についてもやはり、「講義がおもしろくないから」出ないのが各学部とも最大の理由となっており、出なくても自分で出来るから（c項）出ないのではないようである。また、「時間の都合で出られない」というのは予想したよりは少なかったとおもいますが、とりわけ、それが「d、ii、アルバイトのため」だとするのは、法は別としても、工、文のごときはかなりの少ない数字が出ているのは注目される。

これから判断すると、前回ののべたように、ここでも出席意欲を大きく支えているのは講義内容に対する興味であり、ふつうよく云々されるように、それを単位とむすびつけて考えるものは実はそれほど多くないことがうかがえるのである。また、出席を阻害している条件としても、アルバイトや通学の関係からという理由よりも、講義内容に対して興

味がもてないからだとするものが圧倒的多数を示しているのである。そして寒心に耐えないことは、どうやら、その大教室講義においては、およそクラスとしてのまとまりや雰囲気などはひとかけらも存在しないのではないかと、ということである。このことは、一般教育に対する興味について尋ねた項目のところで、興味もてた理由が、内容の理解にむすびついたものが多く、興味がもてなかつた理由として、「クラスが大きすぎたから」だとするものが非常に多かったことも符合していようが、いずれにせよ、一般教育の外

(その三)

	文	法	経	商	工	神	II部
(5) a	63	34	55	66	55	2	12
b	46	52	34	26	30	6	13
c	25	21	29	17	19	3	4
d	34	59	55	46	47	3	9
e	9	18	11	16	15	4	5
f	15	9	20	18	28	0	6
無記入	8	6	2	3	6	0	1
(6) a	102	72	84	75	64	15	12
b	90	118	105	109	127	2	35
c	7	7	9	63	9	1	2
無記入	0	3	2	0	0	0	1
s.q. (i) 1	40	26	37	33	27	8	2
2	40	29	28	28	25	3	6
3	9	13	13	7	2	1	2
無記入	13	7	6	7	10	3	2
(ii) 1	1	4	3	15	3	0	4
2	78	92	88	55	96	1	25
3	6	18	10	86	14	1	6
無記入	5	4	4	2	14	0	0
(7) a	121	115	129	82	145	11	30
b	32	51	58	29	31	1	14
c	43	31	6	32	12	5	5
無記入	4	2	2	50	2	1	1
s.q. (i) 1	109	100	115	67	139	9	28
2	5	5	4	8	4	2	0
3	3	5	6	4	7	0	1
無記入	4	4	4	3	6	0	1

(その四)

	文	法	経	商	工	神	II部
(ii) 1	9	8	7	6	8	0	11
2	16	38	45	19	10	0	0
3	4	5	8	3	11	1	2
無記入	3	1	0	1	1	0	0
III (4) a	70	61	64	82	87	5	34
b	96	107	101	79	82	10	12
c	32	29	33	25	28	3	1
無記入	2	2	2	4	3	0	2
(5) a	117	110	96	107	104	9	24
b	54	64	50	54	41	5	11
c	9	1	3	2	10	0	0
d	30	43	38	27	26	2	15
e	38	28	43	45	53	4	19
f	2	2	2	1	6	1	0
無記入	29	25	31	14	25	3	4
(6) a	124	127	128	108	110	10	21
b	49	51	58	46	42	7	8
c	11	24	17	8	9	0	2
d	35	26	29	28	15	1	0
i	5	14	9	9	4	1	4
ii	10	10	12	10	16	1	4
iii	1	3	2	3	6	0	3
iv	4	2	3	5	18	1	2
e	4	13	3	5	18	1	3
無記入	42	19	28	26	37	3	14

的条件としては、履修方法や時間割、単位などの問題よりは、クラス・サイズの適否が決定的であることは充分考えられなければならない点であろう。そして受講者の意識としては、よく言われるように直接的な効用意識よりは、やはり素朴に知的関心があり、教養主義的な側面がのこっており、それが啓発されることを望んでいることもあわせて、検討すべき問題点として指摘しておきたい。

c フリー・センテンスのまとめ アンケートの最後のフリー・センテンスを閲覧してみると次のような特徴がみられる。

1、ほとんどの学生が、強い勉学意欲をもって真面目に「学問したい」と願っている。実用主義的な要求、社会に出てすぐ役に立つ技術を教えよという要求は意外に少ない。後述のように、専門科目をふやせとか、一般教育は一年間でおわるようにしてほしいといった要求は少なく、反対に一般教育をもっと重視せよ、という意見の方が多い。この点からみて、学生は大人の先入見に反して、新制大学における一般教育の意義をより正しく理解しているといえる。

2、ほとんどの学生が現状に失望しており教育内容や教育のあり方について、痛烈な批判が多いが、その内容は、教育不在の大学の現実をついていることが注目される。

3、教育が教育者のみでなく、むしろ被教育者たる学生の自発的意欲と実践を軸として展開されるべきだ、ということを示す意見が多い。

以上の意味で、これら学生の積極的建設的意見は、今後の一般教育の充実発展のために十分参考として生かさるべきである。以下いくつかの項目に分類してそれらの意見を紹介す

第3図 学部別集計 (その一)

		文	法	経	商	工	神	II部	
I	(1)	a	18	14	12	16	27	1	2
		b	15	17	24	9	20	0	3
		c	167	158	164	168	153	17	45
		無記入	0	1	0	0	0	0	0
	(2)	a	46	28	24	25	26	3	12
		b	30	48	15	22	7	2	7
		c	38	25	32	25	48	2	11
		d	62	65	65	134	54	8	15
		e	87	63	69	76	96	4	20
		f	86	60	56	81	68	8	20
		g	14	17	22	25	15	2	1
		h	56	57	67	64	64	1	23
i		7	12	14	3	15	3	0	
	無記入	15	17	28	8	17	0	3	
(3)	a	33	29	25	14	9	2	5	
	b	26	14	17	16	28	0	7	
	c	13	33	19	14	13	1	3	
	d	68	79	54	63	55	9	12	
	e	85	95	82	80	70	7	17	
	f	21	34	26	19	16	2	8	
	g	123	97	97	108	107	9	12	
	h	19	16	29	26	69	3	14	
	i	15	20	16	18	24	2	3	
	無記入	9	12	17	9	7	0	4	
II	(1)	a	29	39	43	39	36	0	13
		b	12	14	25	14	39	2	3
		c	132	109	110	124	109	10	29

(その二)

		文	法	経	商	工	神	II部
(2)	d	23	23	20	13	10	3	3
	e	4	4	2	2	3	1	1
	無記入	0	0	0	1	3	2	1
	a	64	68	51	56	62	3	17
	b	113	111	138	127	108	9	30
	c	16	10	4	7	7	4	1
	d	6	7	5	2	9	1	1
	無記入	1	1	2	1	4	1	0
	1	14	22	10	11	6	2	6
	2	88	84	106	106	98	7	22
	3	6	3	12	5	8	0	1
	無記入	8	4	10	5	6	0	1
(3)	a	166	146	155	126	157	16	40
	b	68	77	68	50	46	11	12
	c	54	44	38	17	42	3	15
	d	109	88	94	73	73	11	12
	e	82	73	95	65	54	7	22
	f	17	20	22	25	8	0	0
	g	53	54	76	54	140	7	24
	h	34	41	60	37	21	1	3
	i	3	8	2	0	4	0	0
(4)	無記入	1	0	0	1	0	0	0
	a	49	54	44	53	45	1	9
	b	60	75	83	70	64	7	11
	c	25	30	40	29	32	4	13
	d	36	32	21	24	47	3	10
無記入	29	9	16	16	12	3	7	

る。以下「……」は学生の文章そのままである。

① 一般教育の意義について

「一般教育科目の単位数が多すぎる」「一般教養を一年のうちを終了してしまうのがよい」「専門科目の基礎科目としての要素を強くしてほしい」「現行の教養であればやめて専門を少しでも多くするように」という意見もあるがその数は少なく、それ以上に「一般教育科目は、専門科目の勉強だけでは片寄りがちな知識及び人格形成を円満におこなうために設置されていると思う。現在の一般の風潮では専門科目のみを重視し、一般教育科目は粗略にされているようである。……一般教育科目の一層の重視と内容面のレベルアップを深く望む」とか「専門科目の基礎としての一般教育科目でなく、教養を身につける意味で視野の広い講義を望む」といった意見が多い。とくに、ともすれば技術屋的とみられがちな工学部の学生のなかに「専門にあまり関係のない科目が履修できるようにしてほしい」とか「社会科学系列の講座が少なくない」といった希望や批判があり、「二年間一般教育だけにする方がよい」という意見があること

が注目される。「あらゆる学部の講座を一般教養科目として開放してもらいたい」「半期科目をつくって多くの科目を履習できるようにしてほしい」という意見が割に多いことにも注意してほしい。

② 一般教育の内容について

「一般教育科目と専門科目との関連性がありまらないようである。しかし、一般教育でえた思考方法、特に哲学で学んだそれは現在の経済学の本を読むに当って非常に役だっている。……個人の世界観・人生観を身につけるといふ方向へ授業の内容をかえていってほしい」とか「真に自分の問題意識が開発されるのは、一般教育科目三系列の中からであることが望ましい。ところが、現実にはサークル活動においてしか個人の問題意識が開発されていない」「人生に対する深い思索へ導入すべき授業をのぞむ」といった声が多い。そこから、「日本史を例にとると、一応歴史的事実は頭に入っているから、具体的に時代別に文化・科学論的な考えを導入してほしい」とか「一般教育は各分野の歴史的発展及び著名な人の発想法をおしえてくれ」といった具体的な要求がでてくることにもなる。

③ 教師に対する希望

教師に対しては「熱意をもった講義をしてほしい」という声が圧倒的に多い。「先生達は一生懸命講義してくれているのでしよう。しかし、何だかマンネリ化した退屈な授業だったのを憶えています。かえって僕たちにはノートを読まれる先生よりも、そして（たとえ）それが学問的な価値あるものであっても、僕たちは教台で胸を張り、顔を終始僕たちの方へ向けて話される先生の方に信頼感をもてます」「ある専門の教授は毎時間原稿を作って、なるべく現代の問題に沿うような講義内容で学生をひきつける。はたして一般教養科目の中で、一時間じっくりと考えて聞ける講義をする人が幾人いるだろうか」「一般教育科目それ自体の内容と現代学生が感じているものがあまりにもかかはなれている為だと思ふ。一般教育科目の意義を学生にはっきりわからせ、かつ科目の内容をもっと深い内容をもつものにしてほしい」「学生がもっと興味を持って聴講できるよう、一般教育担当の諸先生方は、自分の個性をいかして、通りの講義内容に陥らないように、学生にとっても大きな魅力が感じられるような講義をし

ていただきたい。われわれ学生が共通してもっているような悩み、問題などにもっと触れて、自分の考えなり、経験なりを述べて、御指導を賜りたい。……：単なる知識の切り売りの如き講座は、予備校だけで沢山です。とにかく学生の心理をつかみ、学生のための講義を行っていただきたい」「とくに一般教育の場合には自己の問題意識に照し合せて講義をきく。したがって中学高校時代のような教えこまれるような教育は好まない。自分で考える力を養ってくれる講義をして欲しい」といった意見が多い。

#### ④ 授業における学生の自発性の要求

「大学生の一般教育というものは、高校の学習的なものではないとおもいます。教師から一方的押しつけの学習的であり方に疑問をもつ。学習と学問はちがうということから、もっと学生に問題意識をもたせたり、反撥をかんじさせたりするような内容の講義をしてほしい」「一般教養においても、やはり授業は先生と生徒との交流であるから、講義の進行につれて一般のまた身近かなことや、自身への反省についてレポートをださすようにしたらどうか。交流がないために自分勝手

な仕方では講義をさぼり、自分を見失う」といった意見が多く、ここからも、教師に対する批判と要求がでてくる。

「教師の中でもただいいたい事をいえば、それだけで学生が理解しようとすまいと関係なしというふうな態度の者は免職にすべし」「もっと話し方、つまり学生に理解できるように話してもらいたい」「教授は自分のものをもて、思想的なものをもため先生は何んら学生に影響を与えぬ」「やはり大学であつても丁寧な指導は大切であり、当然と思う」

このように大学の授業における学生の存在の主張は、その基礎に学問への積極的自発性があり、教授との相互交流の期待と自主的成長への意欲とから発している。ここからマスプロ反対・少クラスの要求が非常に数多く出てくる。

#### ⑤ マスプロ反対・小クラスの要求

「大クラス過ぎて個々人が理解しているかを考えず、教授がただ話をする機械のような存在である科目が多くある。」「討論もできるような小クラスを多く設けよ」「学生が多すぎて教師との交流は全くない」しかもマスプロ反対・小クラス要求は「少人数にしてきび

しい講義にしてほしい」とか「小クラスに分けて、ゼミナール形式にして教授と学生とが真剣に問題に取り組めることができればよいと思った。……：二年間を学問に対する態度がある程度でも確立できれば専門に入ってもどれ程役に立つかわからない」「その方が実力もつくだろうし、しっかりした考えを持つようになると思う」といったように、内容的に小クラスを要求している。

#### ⑥ 制度的問題

制度としては、自由に多方面に選択させよ、必修反対の意見が多く、登録制限や基礎科目設置、登録クラス指定に対する反対の声が多い。

「一般教養科目の形式をかえて、広範囲に勉強できるようにやり、試験制度よりレポート制度にする方がよいのではないか」「必修の設定は感心しない」「各自の興味を中心に取得するようにすれば出席率も上昇するでしょう」「学生にとって教養科目は自分にプラスになる自分に欠けたところ及び教養のためであるから、各自に選択の自由を与えよ」「一般教育の履修が現在三六単位であり、一般教育としてこれくらいが丁度手頃と思う

が、その他に現在基礎教育科目が一般教育科目に代って八単位履修せねばならないが、今の場合そのため歴史などが履修できずに終わってしまう。この点を改善してもらいたい。」

### ⑦ 点数への不信

点数のつけ方、試験方法について批判と不信が多い。一般教育はその人の努力に関係

## まとめ

一般教育は、戦前の大学教育において細分化された専門知識人の育成のみが重視されていたことへの反省にもとづいて設置された。

したがって人間のゆたかな形成を教育に期待する思想がそこにはある。が、現実的には一般教育のあやまった位置づけ、旧制大学の観念によるその不当な軽視などの事情がからんで、どこかの大学でも十分そういう成果をあげているとはいえない実情にある。あまつさえ就職問題の切実さのために産業界への安直な奉仕にのみ関心がむけられ、学生の人間形成はますます疎外されてきている。

ほんらい一般教育は現代社会に生きる人間として、社会をただしく認識し、人間らしい

なく点が付くがこれは全くバカけている」あの試験は全くナンセンス、同じ科目内で教授によって点数の差がひどい」「試験は講義の暗記だけで、教師のいう通りでよい点がつく、もっと個人の主体的創造的な意見をかけるような問題にしてほしい。さもなければ学生は点のための手段にしかみない。

人生や社会を創造するための生きた思想と姿勢を形成しなければならぬ。人文科学は人間についての、社会科学は社会についての、自然科学は自然についての思想形成が、それぞれの系列特有の認識・思考の科学的方法を基礎として結実し、それらの総合としての世観の確立がめざされ、現実生活においてそれが行動力の源泉として有効にはたらく性質のものでなければならぬだろう。そのように考えると、本学の場合も今後の課題として次のような問題点を指摘することができる。

- ① 一般教育を大学四年間の前半に限定することはただしいか。
- ② 一般教育といたしながら人間形成がめざさ

れず、レベル・ダウンされた形の専門教育になつていないか。

- ③ 三系列のそれぞれにおいて教育目標が明確にされているか。

- ④ 教育的機能からみて、専門教育との関係が理念的にもカリキュラムのうえでもはっきりさせられているか。

- ⑤ 一般教育が現実に有効性をもつために、三系列の基礎となるような科目の設置が必要ではないか、たとえば広い視野にたつ日本近代史など。

昨年は大学全般の問題についていろいろな角度から問題になることが非常に多かったが、とりわけ大学の一般教育については従来にならぬ真剣な議論があったようにおもわれる。一般教育がそのあり方や本質についての検討とならんで受講者である学生のこれに対する反応意識のくみ上げもまた重要な問題解明の手がかりになるであろうことを確信して予備調査の形で試みたが、本来これはさらに大規模な人員と予算で行なわれるべきものである。これが一つのきっかけとなつて一般教育に対するよりみちの多い検討調査が行なわれることを念願してやまない次第である。